

研究論文

英語教育に向けて一音声学と英語史の役割

上 利 学

Roles of Phonetics and the History of the English Language in Teaching English

Manabu Agari

0. はじめに

現代英語の綴りと発音の習得は、学習者を悩ませている大きな問題である。両者に一定の規則がある場合には習得は容易となるが、規則に合わない例が非常に多い。綴りと発音の乖離を説明する手段として有効なのが英語史の知識である。歴史的な観点から眺めてみると、いわゆる現代英語の謎が氷解することがある。しかしながら、英語史という座標軸だけでは解明できないケースも多々ある。例えば、*doubt* の *b* は黙字 (silent letters) と言われるものであるが、この語がフランス語から借用された時は *b* のない形 (*doute*) であった。その後、ラテン語の影響で *b* が付加されたものである。この *b* は借用時になかったために発音されないと説明されるが、同じような状況で追加された *fault* (< *faute*) の *l* が発音される理由は、通常、英語史の研究書では触れられていない。このような時に役立つのが音声学である。前者の場合は連続する子音 /bt/ の性質が、後者の場合は連続する子音 /lt/ の調音点が鍵となる。いずれも音声学が扱う領域である。小論の目的は、英語史と音声学を融合したアプローチが、現代英語の謎を解く際に有効な手段となることを示すことである。

1. 英語の歴史

具体的な分析に入る前に英語の歴史を概観しておこう。英語の歴史は、大きく古英語期 (750–1100)、中英語期 (1100–1500)、近代英語期 (1500–1900)、現代英語 (1900–) の四つに区分できる。さらに、近代英語期は1700年を境として初期近代英語期と後期近代英語期に分けられる。長い歴史のなかで綴りと発音の乖離を引き起こした主な原因は、外国語の影響と大母音推移である。

全語彙のうち、古英語由来の語彙が占める割合は25%以下である。外国語のうちラテン語、及びラテン語から派生したフランス語がそれぞれ30%弱を占める。まずは、借用語の歴史を辿ってみよう。英語の語彙に占める外国語の割合は非常に高いが、これは外国からの侵入による。9世紀に入るとデンマーク、ノルウェー、スウェーデンのような北欧諸国からいわゆるヴァイキングがブリテン島に侵入した。この侵入により北欧諸語の祖先である古ノルド語が英語に入った。北欧の言語は英語と同じくゲルマン系に属する言語であるため両者は非常に似ており、英国人と侵入者の意思疎通は可能であったと言われている。英語と古ノルド語の関係は極めて近いので、英語話者でも *take, skirt, anger, die* などの日常語が外国語であるとは気づかないと思われる。

英語にさらに大きな影響を与えたのは、1066年の *Norman Conquest* である。フランス人が支配階級を占めたため、これ以降フランス語が大量に英語に流入した。フランス語からの借用語は、古ノルド語からのそれと比較すると日常語が少ない一方で、文化、政治、行政など幅広い分野にわたる。以下に具体例を挙げる。

政治・行政	crown, state, realm, court, parliament, administer, govern, revenue		
軍事	battle, enemy, peace, officer	宗教	religion, lesson, clerk, charity
法律	judge, defendant, accuse	料理	café, chef, gourmet restaurant
社交	ballet, début, élite, etiquette	服飾	bouquet, apparel, costume, dress
学問	study, grammar, momentum	親族	uncle, aunt, nephew, niece

フランス語の借用が続いた後、16世紀になると、14世紀にイタリアで興った文芸運動がイギリスに達し、ギリシャ語やラテン語などの古典語の研究の隆盛に伴いラテン語（ギリシャ語はラテン語を経由して）が大量に英語に流入した。宗教、法律、医学、科学などの専門用語が多いため (*requiem, conviction, dissolve, pneumonia*)、難解な語や抽象概念を表す語が多く音節数も多い。日常語は古英語起源の語が多いが、専門性の高い話題になるほど、あるいは難解な語になるほどフランス語やラテン語を起源とする語が占める割合は高くなる。

以上、古ノルド語、フランス語、ラテン語の借用の歴史を概観したが、ラテン語とフランス語はイタリアック語派に、ギリシャ語はギリシャ語派に属するため、当然のことながらそれぞれの言語は固有の書記体系をもつ。古ノルド語は英語と同じくゲルマン語派に属しているため、両言語は極めて似通っている。そのため古ノルド語は容易に英語に同化した。フランス語、ラテン語、ギリシャ語に関しては、そ

それぞれの言語がもつ書記体系が完全に英語化 (Anglicize) されなかったために、綴りと音声の不一致が残ることになった。ヨーロッパの言語だけでなく、海外進出に伴う諸外国との接触によってもたらされた語も、英語の綴りと発音の関係を一層複雑にした。

綴りと発音の乖離を引き起こした二つ目の大きな原因が大母音推移である。大母音推移とは、1400年頃から約300年にわたって長母音に変化し、音体系全体が変化した現象を指す。変化の特徴は、長母音の調音点が一段階ずつ上昇したことである (図1)。まず、前舌母音の /a:/ が一段階上がって /na:mə/ が /nɛ:mə/ となり、 /ɛ:/ の位置にあった read が /re:d/ となった。同じように、meat は /e:/ から /i:/ に変化した。調音点がこれ以上上昇しない mine の /i:/ は /ai/ に変化した。後舌母音も /ɔ:/ → /o:/ → /u:/ → /au/ と変化した。発音の変化に伴って綴り字も変化するようになったが、ちょうど同じ頃 (1550-1650年) に綴り字が固定したため、綴り字と発音の間に大きな違いが生じるようになった。

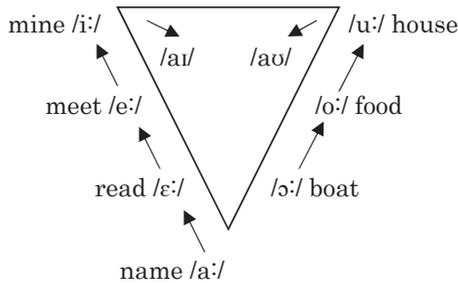


図1 大母音推移

上述したように、外国語の影響と大母音推移が綴りと発音の関係を混乱させる大きな要因となったが、それでもなお両者の間には規則性があり、その理解は英語を学習する上で大きな役割を果たしていることに疑いの余地はない。以下、同化、重子音字による単母音化、そして脱落の三つの観点から考察を進める。

2. 同 化

wife の複数形は f を v に変えて語尾に s をつける。同じように、life は lives となる。なぜであろうか。古英語には v という文字はなく、f で /f/ と /v/ の音を表していた。古英語における wife の綴りは wif で /wi:f/ と発音し、複数形 wives は /wi:vəz/ と発音した。古英語では、有声音に挟まれた無声音は有声化されたので f は /v/ と発音された。この原則は古英語独自の音変化であると思われるかもしれないが、同化の

原理によって説明できる。同化とは、隣接する二つの音が一方あるいは双方に影響を与えて、同じ音あるいは類似した音に変化する現象を指す。例えば、of の発音は /əv/ だが、of course の場合は /əfko:s/ となる。これは of の /v/ が後続する /k/ の影響を受け、/k/ と同じ無声音の /f/ に変化したためである。有声音と無声音が連続するよりも、同じ無声音が連続した方が容易に発音できるからである。Charles Barber は同化について、効率のよさ、つまり少ない労力で発音できる利点を挙げている (44)。

同化によって有声音が連続する場合もある。water の t はアメリカ英語では弾音になり「ウォーラ」のように発音する。無声音の /t/ が前後の母音と同じく有声音となる例である。このように、音声学の知識を活用すれば、英語の歴史を遡って古い英語に接した時にも応用が効く。ただし、個々の事例を見る際には、古英語での語形を確認する必要がある。例えば、wife の f が有声音に挟まれているのであれば /wɔv/ になるはずである。しかし古英語での形は wif なので、単数形の発音は /wɔv/ にはならない。同様の例として、knife/knives, house/houses, safe/saves などが挙げられる。

同化の原理を利用すれば、接頭辞の異綴りも説明できる。例えば、illegal の il は反意語を作る働きがある接頭辞であるが、英和辞書の il- の項をめくってみると、「l の前で」とある。irregular の ir- の項目を見ても同じように「r の前で」とある。さらに imbalance, immature, impossible の接頭辞 im- の項をめくってみると、b, m, p の前で im- となり、in- を参照せよとの記述がある。その in- を参照すると、l の前で il-, b, m, p の前で im-, r の前で ir- との説明があり、堂堂巡りの感がある。関連性がない情報を機械的に覚えることは英語学習者にとって大きな負担となり、いずれ忘れてしまう。しかしながら、ここでも同化の原理を利用すれば疑問は氷解する。接頭辞の il-, im-, ir- はすべて in- を源としており、後続する音の影響を受けて変化しているのである。例えば、in-possible の /n/ は、後続する両唇音 /p/ を発声する準備段階で両方の唇が接しているため、必然的に /m/ に変化しているのである。/n/ が /m/ に変化した要因は同化である。il- と ir- についても同様である (in-legal→illegal, in-regular→irregular)。

規則動詞の過去形の発音も同化が関連している。lived, walked, wanted のうち、学習者が気をつけるべき発音は後者の二つであると一般に言われる。しかし、綴りと発音が一致しているのは wanted である。むしろ lived のように -ed を /d/ と発音する方が特殊である。古英語では -ed の e も発音されていたが、英語の本来的語は語頭に強勢があったため、強勢がない語尾の母音は弱体化して /ə/ となりその後消失した。一方、walked は -ed を /t/ と発音する点で極めて特殊であるが、語尾の -e の音が消失した後は、無声子音の /k/ の同化作用により -ed の発音が /t/ となっ

た。上述したように、音声学の知識は時代を遡っても有益なのである。

3. 重子音字による短母音化

これまで同化を扱ってきたが、ここからは重子音字による単母音化を考察対象とする。先ほど動詞の活用を扱ったが、いわゆる不規則変化をする動詞の場合、*feed/fed*, *meet/met* のように母音が短くなる例がある。学校英語ではこれらの動詞を不規則動詞の例として扱うが、本来は規則動詞である。古英語では、*feed* は *fedan* という形であり、強勢のある母音は長母音の /e:/ であった。過去形は *-de* を付加し *fedde* となった。子音字が二つ重なっているため直前の母音は短くなった。この規則は *ride/ridden*, *write/written*, *strike/stricken* のように現代英語にも当てはまる。*meet* の過去形も古英語の *metan* (e は長母音 /e:/) に *-te* がついて子音字が重なったため (*mette*)、語中の e は短母音化された。動詞の活用が *-de* ではなく *-te* となっているのは、*metan* の t が無声音であるため、同化によって *-te* となったことによる。その後、*mette* の語末の母音が弱化し、e は直前の t とともに脱落して現在の形に至っている。

他にいくつか例を挙げてみよう。*five* の i は二重母音であるのに対し、*fifteen* の i は短母音である。古英語では *five* は *fif* /fi:f/ であった。大母音推移を経て /fai:v/ となったが、*fif* に 10 を表す *teen* が付加されると子音が重なったため、直前の i が短母音化された。名詞を作る接尾辞 *-th* は、現代英語ではその働きを失ったが、古英語期では造語力があつた。*deep/depth*, *steal/stealth*, *wide/width* などが例として挙げられる。*deep*, *steal*, *wide* の長母音は *th* の付加による重子音によって短母音となった。

重子音に先行する母音が短くなる傾向は複合語 (compound) にも見られる。「キリストのミサ」という意味の *Christmas* は *Christ* と *mas* に分割できる。*Christ* 単独では /kráist/ だが、複合語では子音の連続により /krísməs/ となる。*good spell* (よい知らせ) から成る *gospel*, *house band* (家の主人) から成る *husband*, *wild deer* に接尾辞 *-ness* がついた *wilderness* などの短母音化も同じ原理による。*holy day* から成る *holiday* は母音字 i を挟んではいるが短母音化されている。これは音節の重さに関連している。*holy* は二音節から成るが、*holiday* は三音節から成っているため、その分だけ音節の重さが増す。その代償として母音の長さが短くなるのである。*crime* /kráim/ が *criminal* /krímənəl/ になるのも、形容詞を作る接尾辞の追加によって音節が重くなった分、語幹の母音が短くなったためである。同様の例として *type/typical*, *divine/divinity*, *serene/serenity* などが挙げられる。

4. 黙 字

綴りと発音の不一致の例として見過ごせないのが黙字である。綴りにあるのにな

ぜ発音しないのか、或いは発音しないのであればなぜ綴りにあるのか、などの疑問が湧いて当然である。黙字が存在する理由を探ってみよう。*The History of the English Spelling* (185) は、現代英語における黙字 l の例を以下のように分類している。

before F/V: e.g. *half/halve, calf/calve*

before K: e.g. *folk, talk, walk, yolk*

before M: e.g. *calm, psalm, salmon*

この分類を見る限り、黙字の例は機械的に覚えるしか方法はないようだ。しかも cold, salt, false などの l を発音する説明が見つからない。この問題を音声学の観点から解明してみよう。l と直後の音の調音点に着目すると、half では /l/ と /f/ の調音点が異なっていることが分かる。調音点とはある特定の音を発音するときの調音器官の位置を指す。/l/ は発音するとき舌先が歯茎に接している一方、/f/ を発音するときは上の歯と下唇が接している。half の /æ/ から /f/ に移行する際に、/l/ を発音しない方が楽に発音できるという利点がある。talk を発音すればよりはっきりと実感できる。/lk/ を発音すれば、調音点を歯茎から軟口蓋まで素早く移動させなければならない。したがって、/l/ のない簡単な発音に向かったのである (Crystal 158)。発音のしやすさという点から考えると、cold, salt, false の l を発音する理由は明快である。それぞれの語の語末の /d, t, s/ の調音点は /l/ と同じ歯茎であるため、調音点を移動させる必要がないからである。l を発音するかしないかの要因が調音点にあることを示したわけだが、この点について一点付け加えておこう。助動詞の would や should の l が上記の説明に反して発音されないのはなぜだろうか。この二語は本来動詞であり l は発音されていたが、近代英語期に助動詞の機能が発達した。助動詞は機能語であるため、通常強勢が置かれることはない。日常会話のなかで、速くそして弱く発音するうちに l が落ちたと考えられる (Wyld)。

綴りと発音の乖離はルネッサンス期に盛んになった古典研究によっても促進された。中英語期にフランス語から借用された語の綴りをラテン語に合わせる動きが見られた。中英語期および初期近代英語期においてラテン語はヨーロッパの国際語であり、一地方の土着語である英語と比較して権威があっただけでなく、言語そのものにおいても不完全な英語に対して完成された言語と考えられていた。したがって、綴りにラテン語風の装いを凝らすことには一種の権威づけがあった。例えば、doubt は中英語期にフランス語から doute という形で英語に借用されたが、フランス語の祖先であるラテン語では dubitare のように b が含まれていたため、doute にも b が付加された。

綴りのラテン語化

現在の綴り	語源	現在の綴り	語源
de <u>b</u> t	OF dette < L debitum	ad <u>v</u> enture	OF aventure < L advenir
do <u>b</u> t	OF doute < L dubitare	<u>s</u> chedule	OF sedule < L schedula
re <u>c</u> eipt	OF receite < L recepta	ne <u>p</u> hew	OF neveu < L nepotem
fa <u>l</u> t	OF faute < L fallere	<u>i</u> sland	OE i ǣ land cf. isle

ラテン語の影響を受けて付加された子音字は、フランス語から借用された当時にはなかったのだから発音されないと説明されることが多いが、doubtのように /bt/ は発音が難しい。音声学でも扱うように、破裂音が連続するときは最初の子音が脱落する。例えば、stop talking を発音するときには、talking の /t/ を発音する準備のために stop の /p/ は脱落する。同じように、debt, receipt においてもラテン語の要素は発音しない。一方、ラテン語の advenir に由来する adventure の /d/ は、後続する音の /v/ が破裂音ではないため発音するようになった。また、falt の l を発音するのは、連続する子音 /l/ と /t/ の調音点が同じであるため発音に支障をきたさないからである。schedule はラテン語化により ch を加え、発音も変化してイギリス英語とアメリカ英語でそれぞれ別の道を辿ることになった。nephew はフランス語の音を保ってはいるが装いを変えた。ラテン語には ph が含まれていないにも拘らずそれが綴りに入り込んだ。このように、実際には語源と異なる綴りが取り込まれることもある。これは false etymology や erroneous remodeling と言われる現象である。中には island のように、英語本来語であるにも拘わらずラテン語化された例もある。この語は中英語期には iland と綴られていたが、isle との連想による s が挿入されなければ、綴りと発音が一致していたはずである。

次に、綴りのラテン語化に関連し英語学習者にとって非常に厄介な h の問題に触れてみたい。h は発音する場合もあればしない場合もあるが、どのような時に発音するのか或いはしないのかに関する基準を見つけることは難しく、学校教育においても明確に示されることは稀なのではないだろうか。ここでも英語史と音声学の両面から捉えてみたい。語頭が h で始まる語を以下に分類する。

- A) hair, heat, hot
- B) habit, hotel, humid
- C) heir, hour, honest
- D) herb, humour

A) の例は英語本来語である。語頭の h は古英語期から発音され今に至っている。B) から D) の例はすべてフランス語からの借用語であり、更にラテン語に遡る。The *Oxford English Dictionary* によると、後期ラテン語では h は全く発音されなくなっており、綴りからも落ちることが多かった。同じように、古フランス語でも黙字の h は綴りから落ちていた。古フランス語から英語に借用されたのは、abit, erb, onest, onor のような h のない形であった。その後、ラテン語化により h が加えられ、英語の慣用に従って発音されるようになった。綴りのラテン語化は、初期近代英語期に特徴的な現象とされることが一般的だが、実際にはすでに中世後期から生じている。綴り字 h はこの時期から徐々に復活したので、h のある綴りと h のない綴りが混在することもあった。例えば、15世紀後半に書かれた *Le Morte Darthur* には、homage/omage, horrible/orryble, heure/oure のように両方の形が見られる。場合によっては、hostage や hermit のように語源に h がないにも拘らず h が付加されたり、逆に語源にある h が落ちたりすることもあった (hable → able)。英語では元来 h を発音するので、B) の例のように英語の音体系に合わせて発音されるようになったが、C) の例のように英語化されずにフランス語の性質を保っている語も若干残っている。h を発音する英語と発音しないフランス語のせめぎ合いは、D) の例のように発音の不安定さを生み、イギリス英語とアメリカ英語で異なる発音となって現れている。

/h/ は声門音といって呼気が開いた声門を通過するときに生じる音であるため、子音と比べると音が弱い。したがって、h で始まる語が人称代名詞などの機能語の場合、強勢が置かれなるときには /h/ が弱化したり、脱落したりすることもある。例えば、meet her では、/h/ が脱落して /mi:tə/ になることがある。元来は h が発音されていた when, what, where, why 等の語でも、現代英語では h 音の有無は揺れている。h 音は内容語についても一定しているとは限らない。hotel や historical など語頭に強勢が置かれな語では、h 音が弱く発音されたり落ちたりすることもある (Upward & Davidson 122)。英語の統語論を歴史的に辿った Visser による研究書のタイトルが *An Historical Syntax of the English Language* というのも興味深い。

16~17世紀には綴りのラテン語化以外にも黙字が生じた。right, night, know, knock, write, wrong, comb, lamb のように、元来発音されていた下線部の音が発音されなくなった理由を音声学の面から探ってみよう。right と night の gh は古英語期には発音されていた (/rixt/, /nixt/)。理論的には、子音は時間の経過とともに弱くなるため、gh は /x/ から /h/ に弱化しその後落ちた (Lass 1976: 160; 1992: 29)。know の /k/ は1600年以降に落ちた。調音点に目を向ければ合点がいく。/kn/ のように軟口蓋から歯茎に調音点を素早く動かすことが難しいため、語頭の /k/ が落ちたのである。発音のしやすさ (simplification) が変化の要因となっている

(Crystal 158-59)。同じ原理が comb や write にも適用される。comb の b は中英語期までは発音されていたが、子音が連続する /mb/ は発音しにくいために /b/ が落ちた。write は /wrat/ と /rait/ では発音したときの口の形はほとんど同じであるが、違いは /w/ を発音したときの方が口をよりすぼめるという点にある。楽に発音しようとして口のすぼめ方を緩めれば /w/ は自然に落ちる。/w/ は語中で落ちることもある。例えば、sword/sɔ:d/ を発音すると、/s/ から /ɔ:/ に移行する際にすぼめた唇がやや開く。間に /w/ を挟めば、/s/ から /ɔ:/ に移行する際にさらに唇をすぼめる労力が必要となる。この過程を省略すれば /sɔ:d/ となる。/w/ を発音する労を省いた結果である。同様に、toward の /w/ も落ちたが、spelling pronunciation の影響で /w/ が復活したため今では両方の発音が併存する。

5. 終りに

以上、英語史の観点からだけでなく、同化、重子音字による単母音化、脱落という観点から音声学の知見を積極的に応用することによって、現代英語で綴りと発音が乖離している理由を解明してきた。このアプローチを更に活用すれば、学習者の疑問が氷解するのはもちろんのこと、英語という言葉そのものに対する学習者の探究心を一層掻き立てる動機づけになるとと思われる。

参考文献

- Agari, Manabu. 'Latinisation of Spelling in Malory,' *Essays on English Literature and Language in Honour of Shun'ichi Noguchi*, ed., Masahiko Kanno, Masahiko Agari, and Gregory K. Jember (Tokyo: Eihosha, 1997), 93-102.
- Barber, Charles. *The English Language: A Historical Introduction* (Cambridge UP, 1993).
- Baugh, Albert C. *A History of the English Language*, 5th ed. (London: Routledge, 2002).
- Crystal, David. *Spell it Out: The Singular Story of English Spelling* (London, Profile Books, 2013).
- Freeborn, Dennis. *From Old English to Standard English*, 2nd ed. (London: Macmillan, 1998).
- Jespersen, Otto. *Growth and Structure of the English Language*, 9th ed. (Oxford: Basil Blackwell, 1962).
- Lass, Roger. *English Phonology and Phonological Theory* (Cambridge: Cambridge University Press, 1976).
- . 'Phonology and Morphology,' in *The Cambridge History of the English Language*,

- Vol. 2, 1066-1476, ed. Norman Blake (Cambridge: Cambridge University Press, 1992), 23-155.
- Nevalainen, Terttu. *An Introduction to Early Modern English* (Edinburgh: Edinburgh University Press, 2006).
- Pennington, Martha C. *Phonology in English Language Teaching* (New York: Longman, 1996).
- Scragg, D. G. *A History of English Spelling* (Manchester: Manchester University Press, 1974).
- Upward, Christopher & George Davidson. *The History of English Spelling* (Oxford: Wiley-Blackwell, 2011).
- Vinaver, Eugène, ed. *The Works of Sir Thomas Malory*, 3 vols, 3rd ed. rev. by P. J. C. Field (Oxford: Clarendon Press, 1990).
- Wyld, Henry Cecil. *Studies in Rhymes from Surrey to Pope* (London: John Murray, 1923).